

1 年の総括

今後の課題

コーチ 玉井 克典

桜の季節を間近にし、今年度も残すところあとわずかとなりましたが、学生達は幹部交代式や卒業生の追い出しコンパを終え、来年度の新人勧誘の準備に着々と取り組んでおります。新年度を迎えるにあたり、今年度を少し振り返ってみたいと思います。

今年度の戦績を振り返ってみて、その不甲斐ない結果にコーチングスタッフの一員としてまずはお詫びいたします。かろうじて果たせた全国大会出場にしても、昨年度東海関西勢が制覇したおかげで出場枠が一つ増え、そこへ滑り込めただけでした。もちろん選手たちは一生懸命頑張ってくれていましたし、どの競技会もベストを尽くして戦ったと思います。しかし成績にはつながりませんでした。クラブとして何が足りなかったのでしょうか。また今後の課題は何なのでしょう。

大きく捉えると二つの要素が挙げられると思います。まずはクラブとしての地力の不足、次に競技会向けトレーニングの不足ということです。

一つ目のクラブとしての地力の不足ですが、部員も増え活気は取り戻せてきました。しかし数年前の部の危機的な状況時にうまく伝えられなかった知識やノウハウは、まだ十分に取り戻せていないと思います。それは年間の計画から日常の運営までのあらゆる段階で、準備不足やあとから「しまった」と思う反省点として表れていました。

具体的には、クラブの体制強化のため今年度目標としていたウインチマンの養成や自家用操縦士取得者4名(取得者は2名のみ)も、残念ながら果たすことができませんでした。天候や学生の技量習得の進捗状況にも左右されますが、フォローが不十分だったかもしれません。学科試験の合格率の悪さも頭の痛いところです。このあたりの向上

が、部としての知識やノウハウの強化にもつながるはずですので、新年度はなんとかしていきたいところです。

二つ目の競技会向けトレーニングの不足ですが、書類や機材の準備確認不足は一に譲るとして、ソアリングや周回の練習不足はやはり大きな課題です。ライセンス取得までの課程と違い、これをすれば結果が出るというものがありません。それだけに取り組みは難しい部分ではあります。

そのなかで、上昇気流の発生している条件で飛行する回数や時間を増やすことは重要と思います。またそこでの複座機でのトレーニングも有効です。翔友会から援助を頂いていますオーストラリア遠征はその意味で非常にありがたいものです。今後はそれ以外の方策も追加で検討してかなければなりません。新年度は大野での合宿も行う予定ですし、妻沼での練習についても監督を中心に可能性を検討中です。

それから、より長く遠くへ飛べる可能性が高まるスタンダードクラス機の導入の検討も必須です。競技会ではクラブクラス機とはハンデキャップをつけていますが、進むか引き返すかの判断、もうあと一回転するか否かの判断は変わってきます。滑空比が良くなることで普段の練習の幅もひろげることができます。高額の費用がかかることではありますのでハードルも高いですが、勝つための可能性を高めるなら少しでも早く実現させたいと思います。新機体導入の件は学生、翔友会とも大いに議論を深めてほしいと思います。

ということで新年度は、引き続き地力の強化に努めるとともに、競技会で勝てるための方策に取り組んでいきたいと思います。学生諸君、一緒に頑張っていきましょう。